

## 「大学の世界展開力強化事業」第1回外部評価委員会 議事録

日 時：平成31年1月13日（日） 9：50－10：45

場 所：コラッセふくしま 402会議室

### ○委員出席者

：牛木 辰男 委員 新潟大学 理事（国際担当）

草間 朋子 委員 東京医療保健大学 副学長

秋元 正 委員 川内村教育委員会 教育長

### ○福島県立医科大学出席者

教 員：竹之下 誠一 理事長兼学長

谷川 攻一 副理事長（復興担当）

安村 誠司 副学長（学務担当）

山下 俊一 副学長（国際担当）

和栗 聡 副理事（国際化担当）/教授

石川 徹夫 教授

Elena Ryzhii 特任助教

学 生：高野 吉教、孔 秀和

事 務：2名

### ○長崎大学出席者

教 員：山下 俊一 副学長（国際担当）※兼任

宮崎 泰司 教授

高村 昇 教授

Jacque Lochard 教授

Tatiana Rogounovitch 助教

折田 真紀子 助教

学 生：松永 妃都美

事 務：3名

司会進行：和栗 聡 福島県立医科大学教授

### 議事次第：

1. 開会の挨拶（和栗聡 福島県立医科大学教授）
2. 外部評価委員紹介
3. 事業概要説明（高村昇 長崎大学教授）
4. 意見交換、および質疑応答

5. まとめ

6. 閉会の挨拶（竹之下誠一 福島県立医科大学理事長）

## 1. 開会の挨拶

司会：

皆さん、おはようございます。

本来であればコンソーシアム年次総会、その後に外部評価委員会を開催する予定だったのですが、ロシア北西医科大学の招聘先生方の飛行機が遅れ、現在は新幹線で福島に向かっておられます。そのため先に外部評価委員会、その後にコンソーシアム年次総会を開催させていただきます。

それでは第一回の外部評価委員会を開催します。私は福島県立医科大学の和栗と申します。

簡単にイントロダクションを述べさせていただきます。外部評価委員会とは第三者による評価を受け、本事業の改善と推進に努める事が目的になっています。本日は評価委員 3 名の皆様方に、有用なご意見をお聞かせいただければと考えております。

外部評価委員会は、最初の事業計画に元々組み込まれていて、本年度は5か年計画の2年目に当たります。そこで第1回目は、この1年間の取り組みについてご評価いただければと考えております。今後の予定として、本事業の3年目にあたる来年度、文科省による中間評価が予定されています。最終年度の2021年度には最後である2回目の外部評価委員会を行う予定となっています。

本来であれば、コンソーシアム総会の時に自己紹介していただく予定になっていましたが、簡単に私の方から、今日参加いただいている方の紹介をしたいと思います。その後に外部評価委員の皆様から自己紹介をお願いしたいと思います。

（長崎大学・福島県立医科大学の出席者紹介）

## 2. 外部評価委員紹介

司会：

まずは、新潟大学理事・副学長の牛木先生、よろしく申し上げます。

牛木委員：

新潟大学の牛木でございます。もともと医学部の解剖におりましたけれども、国際担当理事

として大学の本部の方でやっております。どうぞよろしくお願いいたします。

司会：

続きまして、東京医療保健大学副学長の草間朋子先生、よろしくお願いいたします。

草間委員：

ありがとうございます、草間です。現在、東京医療保健大学で看護教育にあたっております。40年以上前から東京大学におりまして、放射線防護の専門家としてやって参りました。看護職の役割と言うのは大変重要だと思っております、もともとやってきた放射線と看護を融合させた、放射線看護学というものをきっちり確立していこうと思ひまして、日本放射線看護学会というのを立ち上げて、災害も含めまして、看護職がしっかり貢献できるようにとやらせていただいておりますので、よろしくお願いいたします。

司会：

それでは川内村教育委員会教育長の秋元様、よろしくお願いいたします。

秋元委員：

はい。川内村教育委員会の教育長の秋元でございます。僕は長く、地元の消防機関の方に勤めておりまして、3.11震災から20日間、あの最中におりました。非常に混乱があったという事については、やっぱり放射線被ばくに関しての知識とか技術の欠如が最たる要因ではなかったか、と今でも思っております。今、こんな立場になりまして、地元代表として参加を下さい、と高村先生からのお話もございまして、参加をさせていただきました。どうぞよろしくお願いいたします。

司会：

どうもありがとうございました。今回は、医療健康分野で日露交流を牽引されている新潟大学の牛木教授、それから放射線看護の専門家であります草間教授、そして、大震災の時に実際に自治体側でご苦労された経験をお持ちの秋元様という強力な布陣で、評価いただければと思います。よろしくお願いいたします。

### 3. 事業概要説明

司会：

それでは、早速始めたいと思いますが、まずは、事業の概要の説明からさせていただきます。長崎大学の高村先生、よろしくお願いいたします。

[以下、要点のみ]

高村教授：

平成 29 年度採択 文部科学省ロシア・インド等との大学間交流形成支援「大学の世界展開力強化事業」

一日露大学間連携による災害被ばく医療科学分野におけるリーダー育成事業一概要説明

<本事業の背景>

- 2011 年 3 月東京電力福島第一原子力発電所事故が発生、非常に大きな社会的混乱が起こった。
- その要因の一つに、国内における災害・被ばく医療科学分野の専門家の圧倒的な不足が挙げられる。
- これは日本に限らず世界共通の問題であり、原発建設が進む各国においても当分野の専門家育成は急務である。
- 3 年前に長崎大学と福島県立医科大学が連携し災害・被ばく医療分野の専門家育成に取り組む「災害・被ばく医療科学共同専攻」を立ち上げた。
- 本専攻には「医科学コース」そして「保健看護学コース」の二つのコースがある。
- 医科学コースにおいては留学生を受け入れ、ICRP 副委員長のジャック・ロシャール先生並びに IAEA 元部長ティー・チェム先生はじめ専門機関に従事する方々を客員教授として招聘し、英語での講義を充実させている。
- 本事業はこの災害・被ばく医療科学専攻を主体としている。

<本事業の目的>

- チェルノブイリ原子力発電所の事故を経験したロシアと、長崎、そして福島が一体となってこの災害・被ばく医療科学分野の人災育成を図る。
- ロシア国立北西医科大学をカウンターパートにしたダブル・ディグリーシステムの構築を目指す。

<本事業の概要・進捗状況>

- 2 年間の修士課程のプログラムの中で、放射線防護学、放射線影響学に加え、リスクコミュニケーション学、アセスメント学等という科目を配しており、今年度より「放射線防護学」の単位互換を開始した。
- 次年度は実習科目の単位互換を行う計画である。
- 順次この単位互換を広げていくことによって、将来的にダブル・ディグリーシステムの構築を図る。

#### 4. 意見交換、及び質疑応答

司会：事前に質問票を配布しており、その項目は「(1) 学生交流について」、「(2) カリキュラムの構築」「(3) 事業全般」「(4) その他」となっています。

各委員の質問について (1)、(2)、(3)、(4) の項目別に進めていきます。

牛木委員質問：(1) 学生交流について

1) 本事業はそもそも修士課程を対象としたプログラムであるけれども、派遣する学生については学部生や博士課程の学生が含まれているのは何故か。

回答（高村教授）：

- 派遣学生の主体は修士である。
- 博士課程学生を平成 29 年度に 1 名派遣しているのは、初年度ということで十分な学生がそもそも災害・被ばく専攻に存在しなかったため、興味のある学生を幅広く募集した結果として博士課程の学生も派遣することになった。
- 学部生については、長崎・福島の両校とも、本事業の開始以前から学部生を旧ソビエト連邦に派遣する教育プログラムが存在しており、これを発展する形で学部生も派遣している。この派遣学生の中には、将来的に災害・被ばく医療科学分野の専門性を志す者もあり、若い世代である学部生にも門戸を広げているため。
- 本事業採択時に文科省のプログラム委員会から受けたコメント（「参考資料 2」）に、災害・被ばく医療科学という分野を志す人の絶対数が少ないため、門戸を広げて医学部生や他学部の学生にもその交流の対象を広げてはどうか、とあり、この点も踏まえた上で幅を広げた派遣プランにしているというのが現状である。

司会：

まず牛木委員の質問 (1) の 4) まで進んだ上でご意見を頂きます。

引き続き、2) 受入の北西医科大学の方にも学部生が含まれている件について。

回答（高村教授）：

- 同様に学部生も長崎大学において「放射線防護学」を学んでもらったのは、将来的に修士課程に進んでもらい、人材の育成につなげていくためである。個人的にも感想を聞いてみたところ、講義が非常に面白く、将来川内村での実習も是非参加したいという意見が得られた。

司会：

3) 派遣プログラムにおける長崎大学と福島県立医科大学の連携状況について。

回答（高村教授）：

- 初年度は長崎大学と福島県立医科大学が別々の期間に学生を派遣した。
- 今年度については1月に長崎大学、福島県立医科大学の学生10名が北西医科大学で「生物統計学」の講義を受けて単位互換をする予定である。
- 今後も、両大学の学生が北西医科大での講義あるいは実習を共修する、というプログラムを順次作成していきたい。

司会：

4) 各大学における派遣学生と受入学生の募集方法について。これは草間委員の質問でも問われている。

回答（高村教授・長崎大学）：

- そもそもこの専攻が始まって間もないため、手がまだ上がってきていないというのが現実である。
- そのため希望する学生を積極的に派遣している。
- ただし質の担保は必要であるため、今回の生物統計学を受講する学生には、半年近く前から実際のシラバスに沿った英語の教科書を渡し自己学習させ、その学習状況を適宜確認している。

回答（石川教授・福島県立医科大学）：

- 福島県立医科大学において、学部生については英語面接で選抜している。
- 修士学生については、対象者が少ないため、現時点では希望者を派遣している。ただ本学においても、半年ほど前から英語での生物統計学の補講を受けさせ、英語力及び講義の事前準備に努めている。

司会：

最初の牛木委員の(1)のパートの質問は終了しましたが、ここまでで牛木委員からコメント等ございますか。

牛木委員：

- 個人的には本事業を成功させるために、修士課程だけでなく、大学全体それから全学生が本事業に対しての興味を持つ環境づくりという点で、学部や上級課程の学生も含まれて良く、かつ重要だと考えている。
- 一方、計画調書には明確に「修士課程のダブル・ディグリー」が謳ってある。文科省の評価で聞かれることは、調書に書かれてあることであり、ここをどうするのかということが問われる。
- 今の環境づくりを報告書の中に盛り込んで、目標に辿り着く幾つかの方策としてやっ

ているのだという事を見せたほうがよい。

- 3) について、やはり二大学でやっているの、共同プログラムがあるのは良いと思うが、違う時期に送っているように見える。今年度の修士派遣のように一緒に学生が行っている時期があって、この二つが有機的に結び付くのだという取組を見せた方が良いのではないか。
- 4) について、募集は各大学でやっているかもしれないが、やはり同じプログラムなので、募集ルールに二つの大学の基本形があって、それに基づきそれぞれでやっているというように見せた方が良いのではないか。

司会：

ありがとうございます。長崎・福島から何か。よろしいですか。

次に草間委員の「(1) 学生交流について」の修士課程4名と医学部生5名の学年について。

回答（高村教授）：

- 修士課程については1年次の後期という位置づけになる。
- 学部生は長崎大学については学部の3年生で、「リサーチセミナー」という科目が3年次にあり、それを履修するということになる。

司会：

その次に、アウトカム評価について、これはそれぞれの大学からお願いします。

回答（高村教授・長崎大学）：

- 修士学生のアウトカム評価について、今回は単位の互換になるので、講義を受けた上で、テストなりレポートなりの評価を北西医科大学の先生より課していただき、その上で単位を出していただく、ということになると思われる。
- 学部生の評価については、リサーチセミナーは当然学部の単位という事になるが、成績評価は、派遣先の大学の先生に付けていただいている。その評価表を参考にしながら長崎大学の教員が単位を出すという形にしている。最終的な単位を出すのは本学の教員であるが、その資料として先方の評価を参考にするという形をとっている。

回答（石川教授・福島県立医科大学）：

- 修士課程については、長崎大学と同様に単位互換を行う予定で、既存の修士課程の単位と互換をする。
- 学部生については4年生であり、派遣期間、福島県立医科大学のある講座に所属するという形をとっている。科目名を「基礎上級」といい、ある講座に所属し、その学生

として派遣される。評価はその所属する講座で行うという形式をとっている。具体的には帰国後に学生がレポートを提出し、所属講座の指導教員が成績評価を行う。

司会：

次の草間委員からの質問、派遣学生の選考基準について。

回答（高村教授）：

- 先ほど申し上げた通りになるが、今後、事前の教育というのをしっかりやっていきたいと考えている。

司会：

ここまでで、草間委員、何かコメントはございますか。

草間委員：

- 選考基準に関しては希望者を、という状況はわかるが、少なくとも人材育成プログラムでやっているの、という基準で選考しているかを外に見えるようにしてかないといけないと思われる。
- 学生交流をして、単に単位互換しましたというのではなく、社会にどれだけ還元できるのかということがとても重要であると思われる。
- 今どこでも学生交流をやっているが、何に参加しました、どうでしたと、これだけでは社会に対して見える評価にはならないのではないかと。予め独自のアウトカム評価として何に注目するかというのをしっかり立てておいた方がよいと強く思う。

司会：

どうもありがとうございました。長崎・福島からはよろしいでしょうか。

高村教授：

まさにおっしゃる通りで、大事なことの一つは出口評価であり、ダブル・ディグリーを最終的に取った学生がどういう道に行くか、という事は重要だと考えている。本専攻を修了した1期生に、環境省に入省し、実際に福島県民健康調査の事業を担当する人材も出てきているので、出口評価はきっちりやりながら、この教育効果はどうだったかという事について評価するシステムを作っていきたいと考えている。

司会：

よろしいでしょうか。それでは次に進めさせていただきます。

次は秋元委員の質問について、こちらは主に「参考資料2」の評価コメントに関するものですが、まず日本人学生に対するロシアでのサポート体制について。

回答（高村教授）：

- 長崎大学・福島県立医科大学ともに、ロシア語が分かる教員を配置している。これらの教員を中心に、現地に同行し言語の問題等も含めた学生のサポートに当たっている。
- 危機管理体制については、ウェブ上での渡航者登録を含め、万が一のトラブルに備えた管理体制を引いている。

司会：

次に、ロシアの交流大学の体制整備について。

回答（高村教授）：

- 北西医科大学と長崎大学および福島県立医科大学については、既に学術交流協定を締結しており、その下に、学生交流の覚書を締結している。その中で、お互いの学生交流にあたって、授業料については不徴収にする、といったサポート体制を三大学の間で整備している。

司会：

それから3番目の、福島県立医科大学の役割と位置づけの明確化について。

回答（石川教授・福島県立医科大学）：

- 資料のカリキュラムマップをご覧いただくと分かるように、福島医大の半分くらいの講義について、長崎大学と共同で大学院を運営しているという状況である。
- 福島医大には、震災に伴う原発事故、複合災害を経験した教員が多く在籍しているという特徴がある。そういう教員が共同大学院の講義の中で自分の経験したことを次世代に伝えるという面で、特化した講義なり実習を行っている。今後、ロシアの学生に対して行う実習に関しても、福島の実験を次世代に伝えるという観点を盛り込んだ実習を行う予定であり、そこが福島の特徴であると考えている。

司会：

はい。それでは秋元委員、ここまでで何かコメントはございますか。

秋元委員：

- 今直ぐ改善してスタートしなさいとかという事ではなく、この事業を執行している上で、徐々に改善されていくべきものか、という認識でしたので、良く分かりました。

ありがとうございました。

司会：

はい、どうもありがとうございました。

それでは、最初の「資料3-1」に戻り（2）カリキュラムの構築について牛木委員のご質問から進めます。

最初の1) 短期派遣プログラムのカリキュラムについて、それから、質の保証という意味での単位互換について、先程もちょっと触れられましたが、次の質問にもあるため、互換する科目についても合わせてお願いします。

回答（高村教授）：

- 学部生の派遣プログラムについては「リサーチセミナー」という位置づけであり、実際に、現地の大学でリサーチをする、基礎的な研究をする事が基本となる。例えば昨年度については、チェルノブイリを経験したベラルーシの医科大学の学生における放射線のリスク認知についての研究を行った。それを4週間から6週間行い論文にまとめるという事をやっている。
- 修士学生の単位互換については先ほど申し上げた通りである。
- 受入の学士について、今年度については基本的に「放射線防護学」を学士においても受講する。ただし、修士学生と違い、学士は単位互換の対象になっていないので、基本的には聴講という立場になる。

司会：

今の回答で2)「受入学士はどの科目を受講するのか」まで答えたことになります。

次の3)の質問の、ダブル・ディグリーを目指すには、現在の短期派遣だけではちょっと物足りないのではないか。それ以外の方策について、それから最終的な修了要件のすり合わせについて。

回答（高村教授）：

- 今年度については、ジャック・ロシャール先生による「放射線防護学」を北西医科大学の学生が履修した。
- 次年度は、長崎大学の川内村実習および福島医大の救急医学実習を川内村で行う予定であり、この4単位分の実習を修士の学生が受講し単位互換する、というように、単位互換の幅を広げていきたいと考えている。
- 今後はカリキュラム委員会で検討しながら、徐々に共修し単位互換をする科目を広げていこうと考えている。

- 永続的で継続可能なプログラムにするには、全ての学生が長崎・福島に来る、というのは現実的に難しいので、今後は遠隔講義システムをうまく活用しながら、単位の互換ができるようなシステムを構築したいと考えている。
- すでに長崎大学と福島県立医科大学でかなりの科目でネットを通じたリアルタイムの講義を開き、単位をお互いに提供している。この延長という形でシステムを構築できればと考えている。

司会：

それでは、このカリキュラムの構築について牛木委員、コメントを頂ければと思います。

牛木委員：

- 1) 2) は、単位互換をしたのか、アウトカムは何なのかという事をクリアにすべき。例えば行った人間に対しては行った先の単位を付与する、こちらに来た者にはこちらの単位を付与するようにすればどうか。
- 3) については、かなりシリアスな問題であり、ダブル・ディグリーをやるためには、それぞれの大学の修了要件に合った単位をとらなければいけない。こちらの学生がロシアに行った場合ロシア側大学の学位を取るための単位数を満たさなければいけない。ロシアの学生がこちらに来た時も、こちらの学位を取るための単位を満たさなければいけない。「放射線防護学」の一科目だけやっても、それだけでは修了要件に満たない。
- どのように修了要件を満たすだけの科目をお互い作っていくのか。
- 取れないものは互換という形でやる。ただ互換できる単位数は決まっているので、eラーニングなど幾つか他の方策を立て、クリアしなければいけない。
- 結局は2倍の授業を受けないとダブル・ディグリーにはならない。ジョイント・ディグリーとは少し違うが、ダブル・ディグリーを謳っている以上、2年の間に4年分の事をやらなくてはならないような内容を、どうクリアするかということが問われる。
- それを5年間でやると書いてあるが、現状の「放射線防護学」一科目で進めていっても、3年目の中間評価の時もここまでなのか、と指摘される可能性がある。

司会：

長崎・福島の方は何かございますか、よろしいですか。どうもありがとうございます。

それでは次に、草間委員の質問に移らせていただきます。

最初は、アクティブラーニングの取り入れ状況について。

回答（高村教授）：

- ジャック・ロシャル先生の講義を例にあげると、実際に先生がこれまで経験したチェ

ルノブイリでの住民、あるいは福島での住民との対話をシナリオとして提示し、自分達ならどのように住民に対応するか、といったように積極的に学生に議論に参加させるというアクティブラーニングを行っている。

- 他の科目についても、学生の自発的な学習を促すプログラムを作成している。

司会：

次に、放射線看護学・公衆衛生看護学の担当教員の確保状況について。

回答（高村教授）：

- 担当教員について「参考資料5」をご覧くださいと、保健看護学については、長崎大学・福島県立医科大学それぞれに保健看護担当の専任教員が4名ずつおり、それぞれ科目責任者、あるいは分担の実習責任者が、それぞれ学生の教育にあたっている。

司会：

はい。ありがとうございました。

草間委員、ここまでで何かございますか。

草間委員：

- 今年は「放射線防護学」を中心にやっているということで、英語では“RADIATION PROTECTION”になっているが、医療科学コースであるので、同じ測定するにしても、“RADIOLOGICAL PROTECTION（放射線医学防護）”ではないかと考える。
- 医療の視点における放射線防護であるので、実用にあたっては医療科学コースの中で放射線防護をどう教育していくのか、同じ測定をするにしても“RADIATION PROTECTION”の視点ではなく、“RADIOLOGICAL PROTECTION”の視点からであるということをしっかり認識する必要があるのではないか。
- 看護学コースには入っているが、倫理教育は特に住民対応等にとって必要ではないか。一方、医科学コースでは倫理の科目が入っていない。倫理をしっかり徹底させるという事が重要だと思われるので、入れていただきたい。
- リーダー育成事業であるので、リーダーシップ論的なものをしっかり系統的に教育することで、将来のリーダーを育てていただきたい。なかなか難しいが、そういった視点の教育も是非カリキュラムの中に入れていただきたい。
- そういった科目を特徴的に中間報告等で表す時に、このような教育を行っている、と見えるようにした方が良いのではないか。まさにタイトルとの関係でそういう印象を持った。

司会：

ありがとうございました。

高村教授：

一言だけ。倫理に関してはおっしゃる通りであり、ジャック・ロシャール先生の講義の中でもそういった部分の講義を取り入れているが、今後はカリキュラム上でも見える形でそういった分野を教えていくよう配慮したい。

司会：

はい。他はよろしいでしょうか。

それでは秋元先生のご質問に移らせていただきます。

申請時の審査コメントにある「英語要件」と「単位互換」について。

先ほども触れた内容になりますが、付け加えることはありますか。

回答（高村教授）：

- 英語要件については、ジャック・ロシャール先生を中心に講義の英語化を進めている。
- 実際、本プロジェクトにおいて、ロシア側の英語化・教育の英語化がいかに進んでいるかが一番大きな問題である。
- 今回も北西医科大学の先生方に福島に来ていただき、また、3月には実習先である川内村に来ていただく。その中で英語教育の重要性についてお互い協議しながら、プログラムの改善を目指していきたい。

司会：

次に、復興推進拠点がある川内村でのフィールドワークの際の、小学校・中学校の訪問について。

回答（高村教授）：

- 既にこれまでも川内村の小学校を訪問して、実際に留学生が授業を行ったり対話を行っている。教育委員会のご協力のもと是非継続させていただいて、ロシアの学生についても、小学校あるいは中学校に訪問させていただき交流することで、川内村の国際化を推進するような、あるいは活性化するような事をやっていきたい。

司会：

ここまでで、秋元委員の方で何かコメントございますか。

秋元委員：

- 今までにもこういう取り組みをしていただき、学校側としても大変歓迎をしている。中学校の体験教室にも入っていただき、そば打ちを一緒にやって一緒に食べて、という交流を深めたいという意見もある。継続してよろしくお願ひしたい。

司会：

ありがとうございます。よろしいでしょうか。

それでは次に（3）事業全般について、「資料3-1」に戻っていただき、牛木委員の質問1）直面している問題に対する対策について。

回答（高村教授）：

- 相手方のグローバル化をいかに進めていくかというのは、特にロシアをカウンターパートナーとした場合の大きな課題になると考えている。
- そのため、3月に北西医大の先生にフィールドに行っていただき福島ではこういう教育をしているという事を見ていただく。また12月に長崎大学で開講した「放射線防護学」の講義にも担当教員に受講していただいた。
- 我々の教育を実際に見てもらい、北西医科大学でどのように国際的な教育を進めていくかを共に話し合っていくことが一番の方策であると考えている。

司会：

次に2）平成33年度の事業終了後の自律的な事業の継続プランについて。

回答（高村教授）：

- 講義については徐々にネットでの講義を増やしていき、逐次学生の派遣・受入を行わなくても継続可能なシステムを構築していきたいと考えている。
- 実習については、実際に来る・行くことが必要になる。
- 既にJASSOを採用し、学生の派遣・受入に活用している。このような外部資金の積極的な活用を通じて学生派遣・受入を、特に実習の分野で継続させていきたいと考えている。

司会：

次に、3）受入の際の宿舎などの環境整備について。

回答（高村教授）：

- 昨年度は長崎大学医学部160周年に当たり、それを記念して医学部キャンパス内にゲストハウスを建築した。今回の受入学生は全員このゲストハウスに滞在した。このよう

に学内施設を活用することで宿舎の提供は可能と考えている。

司会：

最後の4) 派遣時の危機管理対策とロシア語文化圏における語学対策について。

回答（高村教授）：

- 長崎大学、そして福島県立医科大学でロシア語に堪能な教員を採用している。これら専門教員による学生への丁寧な対応を継続させていきたいと考えている。

司会：

ここまでで牛木委員は何かご質問・コメント等ありますか。

牛木委員：

- 事業を運営する際、相手があり、双方の大学教育についての考え方も違うものである。
- 例えば単位についても、向こうでは大学によって違ったりしていて、日本のような単位というものが無いので、実は単位はあって無いようなものだったりする。
- こういった違いをどうやって上手くすり合わせていくかという作業は大変である。時間はかかるかもしれないが、うまく調整しつつ事業を発展させていっていただきたい。
- 危機管理については今の時代とても重要視されているので、システムティックに、ただ「やっています」ではなく、具体的にこのようなサービスを使っているとか、ロシアに専門の教員を配置してこういうことをやっている、というように整理した方が良いのではないか。

司会：

はい。ありがとうございました。長崎・福島の先生方は何かありますか。

それでは、次に進めさせていただきます。

草間委員の方からは、(3) 事業全般に関するご質問は無しで、秋元委員のコメントは事業に対する応援を頂いたという形で認識しています、どうもありがとうございます。

次に「(4) その他」に移らせていただきます。

また資料3-1に戻り、牛木委員については、こちらも激励のコメントかと思えます。どうもありがとうございます。

草間委員からのご質問である、修士医学コースの留学生や社会人のバックグラウンドについて。

回答（高村教授）：

- 「参考資料3」に細かくまとめているが、まず留学生のバックグラウンドは主にカザフスタンあるいは東南アジアを中心とした、医科大学あるいは医学部の大学を卒業した学生が中心となっている。それ以外に、薬剤師や、少し系統が変わったところでは、経済学部出身の学生なども含まれている。
- 日本人の社会人大学院生について、保健看護学コースについてはほぼ看護師と保健師になる。医科学コースについては臨床放射線技師や、消防士あるいは救急救命士の方が主体となっている。

司会：

草間委員、この点に関していかがでしょうか。

草間委員：

- 本当にユニークな大学院なので、卒業した方達のフォローアップシステムというのをしっかり構築していただきたい。
- リーダー育成を目指しているのであるから、この共同大学院を卒業した方達に対して、しっかり卒後のフォローアップシステムの形を作っておくと、本事業がより評価されると思う。
- 卒業しました、それでおしまい、というのではなく、学生のフォローアップシステムをしっかりと作っていただくことにより、まさに教育支援がしっかり社会に還元されると考えられるので、ぜひお願いしたい。

司会：

ありがとうございました。

それでは、秋元委員から「(4) その他」のご質問は無しのため、これで頂いたご質問に対する回答は終了しました。

## 5. まとめ

司会：

本当に色々な、有用なご意見をありがとうございました。全体的にまとめるのは難しいですが、かなり貴重な意見を頂きました。特に内容に関しては、差し迫っている中間評価に向け、文科省に対してどういう説明ができるのか、という点以外に、内容においても質を伴うということが一つのキーワードになっていますので、交流学生の選考基準とか、アウトカム評価

とか、細かなカリキュラムの内容、特にリーダーシップ育成に向けてどうしたら良いか、というご意見も頂きました。それから、協力校との連携も見える形で整備して行って欲しいという意見もあったかと思えます。また、補助事業終了後はどのように事業継続するのか、それから社会へどういう人材を送り出すのか、それに対する対策など、かなりシリアスなご質問もあったかと思えます。非常に細かなところまでご意見を頂きましてありがとうございます。これらをきちんと反映させ、事業推進させていただければと思います。

それでは、最後の挨拶について、こちらはお伝えしていなかったのですが、竹之下先生、率直なご意見を頂けたら幸いです。

## 6. 閉会の挨拶

竹之下理事長（福島県立医科大学）：

どうもありがとうございました。3名の先生方には今後とも的確な指摘をお願いいたします。本当にありがとうございました。

司会：

これで外部評価委員会を終了したいと思います。皆さん本当にありがとうございました。